ドラマを大切にうたう姿勢に注目。

ガーナチョコひと区画ずつ折りながら桜の下に月の出を待つ　笹本碧

何気ない表現ながら上句に注目。万葉集以来の伝統的な月を待つ歌の類型から思い切ってはみ出ていて、その分、新鮮。伝統詩ならではの面白さ。

それぞれの目閉づる場所でそれぞれの思ひ綴ぢ込む一分間に　松本実穂

この一首だけ読んでも、黙祷の歌ということが分かるが、じつは、ローマで行われた3・11の追悼集会での作。「それぞれ」が個人々々の意味にも読めるし、世界中のさまざまな国々の意味にも読めるところがポイント。

水鳥のごとくアイロンすべらせてシーツの小さき波を消したり　小寺豊子

シーツにアイロンをかける場面と水鳥が水面をすべる光景の連想が見事。比喩が大らかで、のびのびしていて、読者を楽しい気分にみちびいてくれる。

ピノコとは君が付けたるわが名前星を指差すやうに呼ばれぬ　原尚美

「ピノコ」というニックネームが気に入っているのだ。下句、星を呼ぶように呼ばれたのではなく、指差すように呼ばれたとしたところが見どころ。心にのこる相聞歌である。

蕗の薹ほつこり三つ顔を出す死ぬ気がしないと兜太言ふなり　由田欣一

「選者ルーム」で宇都宮さんが、「意表をつく下の句の配し方が刺激的」と書いている。上句と下句の飛躍がポイントの一首。兜太の生命感の迫力を春の息吹・蕗の薹でシンボライズしている。なお、兜太さんは最近『私はどうも死ぬ気がしない』という本を出した。

兜太さんと会ったのは大学を出て間もないころだから、もう、五十年近くのおつきあいになる。兜太さんの俳句雑誌「海程」の全国大会で講演したり、同誌の座談会に出たりもした。対談の本を二冊出してもいる。最近は朝日新聞社の他は会でおめにかかるぐらいだが、あいかわらずお元気。この歌の通りだ。

好ましく思う人あり好ましく想いてくれるか小さく悩む　稲垣国男

結句「小さく悩む」で思わず顔がほころんでしまう。さり気ないユーモアがうれしい。

病廊の西のはたての窓に来て午前三時の春の月浮く　宇都宮とよ

擬人法で月をうたった作。第五句まで主語が伏せられているので、窓に来たのは作中の「われ」と思っていると、第五句で「月」が主語と分かる仕掛け。この仕掛けによって、ドラマティックなしつらえの一首になった。

村人がこぞり植ゑたる杉の木か管理なきまま花粉を散らす　水本光

昭和二十年代から三十年代にかけて、杉の植林が一気に進んだと聞く。木材の需要を見込んでのことである。「こぞり」が、歴史的見込み外れの空しさを重くひびかせる。